桜と菜の花

風景の句読点 Punctuation of Scene 第15回

惣慶 裕幸 SOKEI Hiroyuki（会誌編集専門委員）

権現堂堤

桜の名所「権現堂堤」（埼玉県幸手市）

権現堂堤

埼玉県北東部を北西から南東に流れる中川と南北に走る国道4号（通称日光街道）が交差する行幸（みゆき）橋から下流側約1kmの範囲が関東有数の桜の名所「権現堂堤」である。権現堂堤は中川（かつての権現堂川）の右岸堤で、部分的に作られたものが流路変遷に伴いつながったと考えられている。

江戸時代の利根川は、現在の利根川と南側の権現堂川の二手に分かれ、権現堂川は今の埼玉県と茨城県の境に沿って江戸川へ流れていた。1783（天明3）年に浅間山が噴火すると、流れ込んだ火山灰が河床を上昇させ氾濫が増加した。1786（天明6）年には権現堂堤が決壊し、洪水は遠く離れた隅田川右岸の浅草・日本橋に達した。1802（享和2）年にも大洪水が発生し、堤は1803年に幕府の費用で強化された。

堤頂部

桜の名所へ

もともと埼玉県北東部は排水が困難な低地である。権現堂川や江戸川の河床が上昇すると水位も上がり、突発的な洪水被害だけでなく、河川に排水できずに長期間水が溜まることによっても農業に深刻な被害を与えた。被害を軽減しようと1875（明治8）年に行幸橋のあたりから北へ日光街道に並行した新堤が築かれ、翌年に明治天皇が堤を訪れたため「行幸堤」と名づけられた。

1900（明治33）年から始まった利根川改修は、派川の江戸川や並行する中川も含んで、上流からの洪水を利根川が、低地の排水を中川が担うよう再構成され、利根川は現在の流れに変わった。権現堂川は廃川に、権現堂堤は洪水を防ぐ役割を終えると決まった。1920（大正9年）に行幸堤史蹟保存会が結成され、権現堂堤の6kmの区間に3,000本のソメイヨシノが植えられた。

権現堂川は、利根川と接する上流側が1926（大正15）年に、江戸川と接する下流側が1927（昭和2）年に締め切られ、排水を担う部分は中川になった。中川から海に注ぐようになると河川の水位が2m以上低下し、埼玉県北東部の湛水被害は排水ポンプが不要になるほどに改善した。

堤断面

権現堂堤は桜の名所として有名になっていったが、第二次世界大戦末期に薪としてほとんど伐採されてしまい、1949（昭和24）年に改めて3,000本のソメイヨシノが植えられた。1988（昭和63）年に、周辺の農地に菜の花が作付けられ、桜色の堤と堤下の黄色という印象に残る風景が生まれた。

川と人との関わり

桜の時期以外にも楽しめるようにと、堤にはアジサイ・ヒガンバナ・スイセン等が植えられている。人が訪れる堤には重ねてきた歴史を物語る石碑や、樋門等の遺構も見られる。近くには天明6年の洪水が地面をえぐった「押堀（おっぽり）」起源の高須賀池もある。川と人との関わりに思いを馳せながら巡ってみてはいかがだろうか。

<参考資料>

1)「近世後半の権現堂堤強化と赤堀川拡幅」　松浦茂樹　水利科学　No.380（第65巻第3号）　2021年8月　（一社）日本治山治水協会

2)「庄内古川外三悪水路改修工事概要」　庄内古川悪水路普通水利組合外三ケ組合連合　1928年　国立国会図書館デジタルコレクション　https://dl.ndl.go.jp/pid/1224397

3)「権現堂堤」　https://www.city.satte.lg.jp/soshiki/shoukoukankou/3/2225.html

<写真提供>

P32上写真：幸手市観光協会

P33上、下写真：惣慶裕幸

「風景の句読点」は、私たちの心に句読点を打ち、思わず足を止めたくなるような素晴らしい風景について、その成り立ちや魅力の源泉を紹介するコーナーです。